

『僕はメイドの性奴隷』

ギンソウ

「それではご主人様、今日の務めをお願いいたします」

薄暗い寝室の中、豪華な椅子に腰かけたリーラはそう言うのと、僕の前でニーハイを脱いだ生足を差し出した。

ランプに照らされた銀色のセミロングの髪。燃えるような緋色の瞳に白い肌。ぷっくりと下唇にどこか幼さを残した表情。平素は穏やかな彼女が私に向けるのは、明らかな侮蔑の表情。

濃紺の絹のメイド服に白いエプロン、そしてシミ一つ無い白い肌に小さな足。手入れされた足の指。

柔らかなカーペットの上に膝をついた僕は、彼女の足をその手に取ると、僅かに躊躇いながらも舌を伸ばして彼女の足をペロリと舐める。親指の爪から指の間を舐めるように舌を這わせ、彼女の足の臭いで鼻腔を満たしながら丹念に、ゆっくりと舐めしゃぶる。

「クスクスッ……。だいぶ上手になりましたね、ご主人様。お姉様もとっても気持ちよさそうですよ」

一心不乱にリーラの足を舐めていると、耳元でもう一人のメイドが僕に向かって囁きかける。

歳は僕と同じ十八歳。長い金色の髪を結び上げて、澄んだエメラルドのような瞳で僕をニンマリと見つめているのはメイドのクリス。嗜虐的な笑みを浮かべ、僕の背中に向かってツーンと指を走らせる。

「んんっ……。んはああ……」

直接背筋を撫でられるこそばゆさに僅かに身を震わせて足舐めをおろそかにすると、リーラがゴミを踏みにじるように足を突き出して、僕は僅かに痛みを覚えて身を振る。

「あはっ♡ ご主人様ったら、お姉様にお仕置きされて勃起してるう」

ふと見れば、クリスは銀色の金属製の貞操帯をつけられた僕のペニスに向かって指先をのぼしている。貞操帯の中で大きくなり始めた男根は、しかし十分に勃起する前に金属の網の中で締め付けられて、その痛みで充分に勃起することさえ許されない。

寝室の中、跪き、貞操帯以外の全ての衣服の着用すら許されず、メイドの二人に奉仕する。これが僕の日常。

年若く美しいリーラとクリス。メイドの二人は僕を性奴隷にする、性教育担当のメイドだった。

……………。

僕の育った西園寺家は正時代に財をなした古くからある名家だ。

昔に建てられた洋館は広く、高価な調度品がいくつも飾られている。学校も名家の子女が通うエスカレーター方式の名門に通わせて貰い、何不自由なく僕は生活をしていた。

だが、高校も三年生になったある日の事だ。僕は冬至当主でもあった父さんに呼ばれ、女性を抱くように申しつけられたのだ。

「お前ももう、十八。そろそろ婚約者を見つけなくてはならなくなる。

そんなお前が未だに女性経験も無いようでは困るだろう」

父さんの言葉に僕は大きなお世話だと思いつつも、僕の性教育の担当者として、洋館に働いているメイドの中から好きな者を選べと命じられた。

そして当時、僕が選んだのが少し年上で姉のように慕っていたリーラだったのだ。

今でも初めての夜のことは忘れられない。

皆が床についた夜の寝室。リーラはいつものメイド服姿で僕の元を訪れたのだ。

「それでは……、伽をさせていただきます」

白い頬を染めて、僕の目の前でメイド服に手を掛けると目の前で脱いでいくリーラ。ランブに白い肌が照らされて、真っ白で大きな乳房も、ピンク色の突起も、全てが露わになる。

「どうぞ、ご主人様……」

そう言ってリーラが目を瞑ってベッドに横たわり脚を開いて秘所を晒すと、陰毛までもが銀色なのだ、と初めての女性器を見たのに余計なことばかり考えてしまう。

それでも初めて女性を抱けるのだという感動でリーラの脚の間に身体を入れて、彼女の秘所に男根をあてがう。

だが初めてのこと。秘所にあてがうが、穴の位置もわからない。男根は上滑りするばかりで、リーラが訝しんで指先で開いて導いてくれるけれど、うまく挿入することもできない。

緊張と焦り、情けなさが無い交ぜになって、徐々に僕の男根が柔らかくなっていく。どうしようー、僕がそう思っていた時だった。

「ご主人様は……セックスも満足にできないのですね」

クスリとリーラが笑うと、僕の腕を引く。僕達の位置は完全に逆転して、気が付けば僕はベッドに押しつけられていた。

「ふふっ。おちんちん、柔らかくして……、情けない。西園寺家の時期後継者は女性を満足させることもできない雑魚チンポでしたか」

普段は穏やかなリーラに男根を直接握られる。ひんやりとした指先で掴まれて上下に扱かれる。そして彼女は言ったのだ。

「初めては好きにさせてあげようと思いましたが、やめです。ご主人様、手コキでまた硬くなるくらいの雑魚チンポなのですから、このまま果て

させて差し上げます。それで構いませんよね？」

輪を作った指先にカリと亀頭を擦られて強制的に勃起させられる。

「やめてっ、リーラ！ やめてくれっ！」

「どうしてです？ おちんちんは気持ちいいって言ってますよ？ カウパーが止まらないじゃ無いですか。オマンコにも入れない雑魚チンポ、早く精液ビュツビュしちゃいましょうね♡」

普段の彼女からは想像できないほどに激しく騷るようにチンポを扱きあげると、ついに亀頭の先端から精液が噴き出てしまう。

「はぁ……、あぁあっ……」

「もう出てしまいましたか？ まだたった数分ですよ？」

息も絶え絶えになりながらリーラとの初めての夜を終えた僕。彼女は口持ちに笑みを浮べ、蔑む表情で僕を見下ろし、指についたザーメンを擦りつけるように僕の腹を撫でていた。

「ご主人様は早漏でもあったんですね♡ 早漏で、こらえ性のない童貞チンポに女性のオマンコなど勿体ないですよ？ 仕方がありませんから……、今日からは私がご主人様の射精を管理してあげましょう。私のペットになれば、少しはマシンになるんじゃないですか？」

その夜以来、僕はリーラに貞操帯をつけられて、射精どころか勃起すら彼女に管理されることになったのだった。

……………

「さて、ご主人様。そろそろ私も気持ちよくしてただけませんか？」

僕の足舐め奉仕に満足したリーラが僕の目の前でショーツを脱ぎ捨てる。僕の童貞を奪った秘書を前に、僕のチンポが硬くなっていくのがわかる。貞操帯に締め付けられる痛みが酷く。

僕はようやく挿入させて貰えるのだと、身体を起すと貞操帯の鍵が外

されるのを待つ。しかし、リーラは蔑んだような表情で貞操帯の上から僕のチンポを踏みつけると、口元に手を当てて嘲笑する。

「何勘違いしているんです？ ご主人様の雑魚チンポを挿れさせてあげるわけ無いじゃないですか♡ 今日はおこち、まずはご主人様、私のオマンコに奉仕をしましょうね」

そう言ってリーラが僕に差し出したのは、黒光りするギャグボールデイルドだ。口に啞えるボールは金属製のフックがつけられ、僕の頭に固定されるようになっていた。

そして、ボールの先端から正面に向かって、男根を模したデイルドが伸びている。

「口チンポ、とてもお似合いですよ、ご主人様」

リーラは僕を嘲笑うと、椅子の上で股を開く。そして僕は彼女の股座に顔を埋めて、彼女の秘所にデイルドを挿入する。

「んんっ……、あっ……、んああっ……♡ いいですよ、ご主人様♡ 今日おはちゃんと挿入できましたね♡」

リーラの秘所から立ちのぼる淫臭で鼻腔を満たし、両手を床につき、四つん這いになって頭を前後させる。ぐちゅっ、ぐちゅっとお尻を床に押しつけて、彼女の秘所からは愛液が漏れ出て、僕は彼女の秘所を凝視しながら奉仕を続ける。

「んんっ、ちょっと遅くない？ ご主人様、サボってます？」

しかし、そんな僕の様子を見ていたクリスが僕に訊ねる。勿論、僕はサボったりしていない。全力でリーラに奉仕をしている。けれど、クリスはそんな僕を責めるように陰囊を掴むと、同時にお尻を叩き始める。「ほら、ほらほらほらっ！ マズチンポおっ起してないで、もっと媚びるように奉仕しなさいよ！ でないとお姉様が満足できないでしょ！

それとも、この金玉潰さないで、一生懸命になれないの！」
「ふぐうううううううっ！ んぐうううううううううっ！」

金玉を強く掴まれて、その痛みに僕は悶える。

さつきよりも懸命に頭を前後に動かし、身体全体を使ってリーラのママンコに奉仕する。

「んあああっ♡ いいわ、クリス。もっとして♡ ようやくオマンコの気持ちいいところに当たり始めた♡」

「はい、勿論です♡ ほら、ほらほらっ！ やっぱサボってたんじゃない！ 性奴隷の癖に！ 肉バイブの癖に！ あなたは私たちのオマンコを気持ちよくさせる為の道具なの！ わかったら口チンポを動かさない！ 下半身の雑魚チンポが使えないんだから、口チンポでちゃんとイかせられるように努力しなさいよ！」

クリスが玉を揉みほぐされていると、ゾクゾクと腰のあたりに性感が広がっていく。お尻を突き上げ、僕は涎を口の端から垂らしながら犬のように奉仕を続ける。

しかし、結局リーラはいくことが出来ず、僕は全身から汗を流しながら、絨毯に上で這いつくばっていた。

……………

リーラと初めての夜を過ごした翌日の事。

もう皆が寝てしまった夜に、僕はクリスに連れられて屋敷の廊下を歩いていた。クリスは僕と同年代でありながら屋敷で働いているメイドの一人で、リーラを実の姉のように慕っている侍女の一人だ。

僕が初体験の相手にリーラを指名したことに幾らか怒っていたクリスだが、彼女は全てをリーラから聞いていたのだらう。昼間はやけに機嫌が良く、ニヤニヤと僕を見て嗤っていた。

案の定、僕はこの時、クリスに指示されるままに寝室から連れ出され彼女に首輪のリードを引かれて歩いている。

曰く「お姉様のペットの世話を買って出ている」らしい。

僕が身に付けているのはリードのつけられた犬用の首輪に銀色の貞操帯。それ以外は何一つ身に付けることもなく、絨毯の敷かれた夜の屋敷の中を散歩させられる。

幸いにも屋敷の中に澄んでいるのは僕とリーラ、クリスを除けば後は別館に住んでいる使用人がいるだけで、両親も普段は屋敷にいない。

だから誰かに見られるという心配は無いのだけれど、普段生活する場所ですら裸になっているというシチュエーションに僕は息を乱していた。

「クスクス……。話には聞いていましたけど、本当にご主人様ってマゾだったんですね♡ 最初から尊敬とかはなかったんですけど、ああやっぱりって幻滅しちゃったなあ♡」

クリスは最初からリーラと同じように僕を性奴隷にしようと思っていたのだらう。屋敷の中を連れ回し、庭に出ると僕に犬の真似をさせてチンチンや伏せを強要しようとする。

人としても扱われない。それなのに僕は興奮してしまったのだらう。

「あははっ！ 何で、こんなことさせられて勃起しているの？ なさけなあいっ！ もしかして、こういう風に苛められるのが好きなのお？」

クリスが僕を見て嘲笑う。

確かに僕は彼女が言うとおりに、人として使われず、蔑まれることに性的な喜びを感じてしまっていた。大切に人の上に立つように育てられていたからこそ芽生えてしまった矛盾。

気が付けば僕は彼女達に平伏してしまっていたのだ。

「もっと……、もっと僕を苛めてください……」

僕はその場で僕を馬鹿にしていたクリスに懇願していた。地べたに這いつくばり、額を地面に擦りつけ、僕を見てニヤニヤと嗤う彼女に全裸で土下座懇願していたのだ。

「いいよ。お姉様もきつとそう言うだろうって言っていたから……。こ

の場でおちんちんシコシコできたら、今日からあなたも性奴隷にしてあげる♡」

クリスはそう言うと、僕の貞操帯を外してくる。そして夜の庭で、僕は彼女の前で自慰を始める。クリスの目の前で膝をつき、チンポを握りしめて自らのチンポを上下に扱く。

そして庭の地面に射精してしまった僕に彼女は囁くのだ。

「仕方ありませんから、マゾペットとして飼ってあげますよ、ご主人様♡」と――。

……………。

口チンポのご奉仕でリーラを満足させられなかった僕は罰として、両手両脚をベッドにつけられた手枷と足枷をつけられ、全裸で大の字にされていた。

「ご奉仕も満足にできないなんて情けない……。仕方が無いから、もう少しだけ、ご主人様にチャンスをおあげます」

その言葉に何をされるのだろうかかと胸を高鳴らせていると、僕の目の前にボンテージ服に着替えたクリスが歩み出る。そして僕は彼女の股間を見て思わず身を震わせた。

「ご主人様、今日はたっぷりと私が可愛がってあげますね♡」

言いながら股座に伸びた黒い張型を撫でるクリス。彼女が身に付けているは僕を犯すためのペニスバンドだった。

クリスは鼻歌でも歌うようにペニスバンドにローションを垂らすと、ベッドに上がって僕の脚の間に膝をついて迫ってくる。僅かにお尻が浮き、僕のアナルに彼女のバンドチンポが当てられる。

「それじゃあご主人様、良い声で鳴いてくださいね♡」

次の瞬間、お尻にペニスバンドが挿入されて、僕は背中を仰け反らせ

